

# 博士学位論文審査要旨

2015年1月17日

論文題目：伝統的ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の獲得と活用—大学図書館員のソーシャル・ネットワーキングに着目して—

学位申請者： 天野 絵里子

審査委員：

主 査： 総合政策科学研究科 教授 PHILIPPE BYOSIERE

副 査： 総合政策科学研究科 教授 藤本 哲史

副 査： 総合政策科学研究科 教授 中田 喜文

要 旨：

本論文は、情報技術（IT）の社会的浸透に伴い、大学図書館員というナレッジ・プロフェッショナルが引き起こす新たなイノベーションに関する分析と考察を試みたものである。本論文は、学位申請者が独自に行ったインタビュー調査とアンケート調査の分析を通して、①ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の構成、②ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の獲得チャンネル、③ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識獲得に対して個人のソーシャル・ネットワーキングが与える影響、④ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の獲得と活用に対する組織要因の影響、について明らかにしたものである。

学位申請者は、本論文を通して、ITの進展によってナレッジ・プロフェッショナルとしての大学図書館員が直面する問題について詳細な指摘を行ったのみならず、彼/彼女らの新たな知識の獲得・活用において、伝統的な専門職集団と比較して、ソーシャル・メディアの重要性が増していることを指摘している。また、大学図書館員は、組織に依存するよりも寧ろプロフェッショナル・コミュニティに依存した情報管理専門職になっており、それによってイノベーション創出がなされていることも指摘している。

学位申請者は、本論文において、理論的インプリケーションとして、ナレッジ・プロフェッショナルの知識獲得において、組織を超えた個人のソーシャル・ネットワーキングの役割が大きいことを明らかにした点、自律的な行動を好むナレッジ・プロフェッショナルに対しては知識共有を促進させることによって組織のイノベーションに貢献させることが効果的である点、などを示している。また、実務的示唆として、大学図書館員が変革につながる実践的知識を得るには、組織を超えたネットワーキングの機会を活用することが効果的である点などを示している。

本論文は、分析モデルに改良の余地は見られるものの、ナレッジ・プロフェッショナルに対するマネジメント及びそれによってもたらされるイノベーションに対して有効な知見・提言を示す研究であり、学術的価値を十分に見出せる。

よって、本論文は、博士（技術経営）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2015年1月17日

論文題目： 伝統的ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の獲得と活用ー大学図書館員のソーシャル・ネットワーキングに着目してー

学位申請者： 天野 絵里子

審査委員：

主 査： 総合政策科学研究科 教授 PHILIPPE BYOSIERE

副 査： 総合政策科学研究科 教授 藤本 哲史

副 査： 総合政策科学研究科 教授 中田 喜文

要 旨：

学位申請者に対する総合試験は、2015年1月17日午前10時30分より1時間にわたって行われた。学位申請者は、約30分にわたり、博士論文に関する口頭説明を行った。パワーポイント資料を使用して、ナレッジ・プロフェッショナルとしての大学図書館の変遷に関する説明を行い、イノベーションに影響を与える要因としてのプロフェッショナル間での結びつきやコミュニケーションの様式にはどのような形態があるかという点が本博士学位論文における主眼点であることを説明した。学位申請者による口頭説明に引き続き、論文審査委員からの質問がなされた。各審査委員から、論文内容、今後の研究課題に関する質問がなされ、それらの質問に対して、学位申請者は適切な返答を行った。学位申請者は本論文において、多くの国内外の先行研究の渉猟を行っており、博士学位にふさわしい英語力を持つことが確認された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： 伝統的ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の獲得と活用 - 大学図書館員のソーシャル・ネットワーキングに着目して -

氏名： 天野 絵里子

## 要旨：

学術的な知がオープンに開かれることによって、学術コミュニケーションの方法が大きく変わろうとしている。その中で、学術的な知識を生み出し、活用し、蓄積し、流通させてきた大学教員や図書館員など伝統的なナレッジ・プロフェッショナルの仕事も変わってきた。伝統的ナレッジ・プロフェッショナルは、知のオープン化を促進する役割を果たしながら、その変化に翻弄されてきた職業でもある。知のオープン化は避けられない流れであり、ナレッジ・プロフェッショナルには仕事の変革が求められている。

ここで、ナレッジ・プロフェッショナルが、どのようにして変革に結びつく具体的な知識を獲得し、組織の中で活用し、変革につなげているのかという疑問が生まれた。ナレッジ・プロフェッショナルは、専門教育課程や伝統的な職業団体が提供する研修の機会だけでなく、組織を越えた非公式のソーシャル・ネットワーキング活動によっても知識を獲得している。さまざまな知識獲得の機会はあるが、変革に結びつく知識はどこから得ているのだろうか。また、ナレッジ・プロフェッショナルは、さまざまな組織の中で仕事をしている。組織がどのようなナレッジ・マネジメントを行えば、彼らの知識獲得や活用を促進でき、変革につなげることができるのだろうか。

本研究は、このような伝統的ナレッジ・プロフェッショナルが、変革に寄与する具体的な知識をどのように獲得し、組織の中で活用して変革に結びつけるかを把握することを目的とし、組織間の知識の流れにおいて個人のソーシャル・ネットワーキング活動に着目し、調査と分析を行った。研究対象は、日本の大学図書館員とした。よって、本研究のもう一つの目的は、大学図書館員の変革を促進するための実践的な示唆を得ることである。

序章では、研究の背景として、学術コミュニケーションのオープン化に伴う変化を概観し、第1章では、プロフェッション研究を振り返りながら、本研究の枠組みとなるプロフェッショナルの多面的モデルを示した。また、変革につながる知識の獲得について、特に組織間ソーシャル・ネットワーキングの役割について述べた。第2章では日本の大学図書館員の現状を分析しながら今後の課題を探った。第3章は、調査の第1段階として、インタビューの方法と実施結果を述べ、考察を加えた。第4章では、調査の第2段階として、インタビューの結果を踏まえた質問紙調査の方法と実施結果を述べ、統計的解析を行い、考察を加えた。終章では、2つの調査・分析結果を総合的に考察し、結論と理論的・実務的インプリケーション、及び今後の課題を述べた。

調査の第1段階のインタビューでは、さまざまな大学、職位の26名の大学図書館員にインタビューを行い、Basic, Experiential, Creative/Emotional, Innovativeの4つの知識ドメインごとに、仕事で実際に必要としている具体的な知識要素とともに、大学図書館でいま何が革新的なサービス/事業であるかと、それらの実現につながる知識の要素を抽出した。結果、革新的なサービス/事業につながる知識として、Basicドメインでは、学術情報や高等教育業界のニュースと、目録や検索など図書館特有の専門的知識とともに、ICTに関連する知識があげられた。Experientialドメインでは、組織固有の知識や、他部署のスタッフや同僚、利用者とのコミュニケーションがあげられた。Creative/Emotionalドメインでは、柔軟性やホスピタリティなど、意

見がわかれた。Innovative ドメインでは、新しいサービスや事業を実現させるために、プレゼンテーション能力や、企画・プロジェクト遂行力が挙げられた。

第2段階の質問紙調査では、第1段階のインタビューで把握できた、変革につながる主な知識の要素について質問紙調査を実施し、それらの知識が獲得される主なチャンネルと知識獲得・活用の度合い、個人のソーシャル・ネットワーキング志向、組織のナレッジ・マネジメント志向と、組織のイノベーション度合いについて465名から回答を得た。うち446名の専任職員の回答を用い、分析モデルを作成し、共分散構造分析等による解析を行った。

以上の調査・分析にもとづき、明らかになったことは以下のとおりである。

#### 課題 A. ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の構成

インタビュー調査によって、大学図書館員の知識は、目録などプロフェッション固有の知識や、コミュニケーション能力、組織固有の知識や人脈など、幅広い要素で構成されていることが明らかとなった。また、仕事に取り組む上での姿勢や柔軟性などの態度も必要であるとされる。先行研究よりも幅広く、実践的な知識の構成が抽出できた。

中でも、新しい提案を交渉により実現に結びつけるプレゼンテーション能力や、プロジェクトを企画し、遂行するという経営管理的知識がもっとも変革に結びつくことがわかった。プロフェッション固有の知識をベースとし、経験と人脈とマインドを併せ持って企画を実現させる知識を持つことが、変革に結びつくと考えられる。

#### 課題 B. ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の獲得チャンネル

質問紙調査によれば、ナレッジ・プロフェッショナルの特性を反映して、自学自習によってもっとも多く知識を獲得している。職場から指示されて参加する公式な研修・イベントの機会からは、特に専門的な知識を着実に得ている。また、各地で図書館員による自発的なプロフェッショナルコミュニティ活動が立ち上がっている。伝統的な学協会とともにプロフェッショナルコミュニティの提供する機会に非公式に参加して得られている知識は、公式な機会に比べると少ない。しかしながら、学外の人とのオフライン・オンラインでの交流も含めた非公式な機会は、プロフェッショナルとしてのマインドといった知識を高め合う場としての可能性があると考えられる。

#### 課題 C. ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の獲得に対する個人のソーシャル・ネットワーキングの影響

学協会やプロフェッショナルコミュニティに参加したり SNS を活用するなど、自発的なソーシャル・ネットワーキングを行っている人ほど変革に結びつく知識を多く獲得している。そういった自発的なソーシャル・ネットワーキングを行動に移している人は回答者の半分程度であり、いずれにも参加していない、SNS をあまり使わない人との知識の獲得には大きな差があった。

また、傾向として、図書館外の人とのソーシャル・ネットワーキングから学ぼうとする人は、変革につながる知識をより多く獲得しているということが明らかになった。

#### 課題 D. ナレッジ・プロフェッショナルの変革につながる知識の獲得と活用に対する組織要因の影響

知識共有を促進し、研修やイベントに参加することを奨励している組織は、プロフェッショナルによる学内外でのソーシャル・ネットワーキングを活性化させる。特に、知識共有を促進している組織では、プロフェッショナルは変革につながる知識をより多く獲得する。組織が知識共有を促進するナレッジ・マネジメントを行うことによって、プロフェッショナル個人が自発的に知識の獲得を行うようになると考えられる。

さらに、知識の活用は、大学図書館のイノベーションにつながる。しかしながら、プロフェッショナルに固有の専門的知識だけでは革新的なサービス／事業の実現には結びつかず、コミュニケーション力や人脈、仕事への思いや心構え、実行力やプロジェクトマネジメントといった経営管理的な知識も含めた複合的な知識体系を持つことが、変革には必要であると考えられる。

本研究の理論的なインプリケーションとして、ナレッジ・プロフェッショナルが具体的にどのような知識を活用すれば変革につながるのかということが明らかになった。プロフェッショナルの変革に結びつく知識獲得において、組織を超えた個人のソーシャル・ネットワーキングの役割が大きいこともあらためて明らかになった。自律的な行動を好むナレッジ・プロフェッショナルを、知識の獲得と活用を通じて組織のイノベーションに貢献させるには、知識共有を促進する環境を整えるという、組織のナレッジ・マネジメントが有効であるということがわかった。

実務的なインプリケーションとして、大学図書館員が変革につながる実践的知識を得るには、組織を超えたネットワーキングの機会を活用することが効果的であるということがわかった。大学図書館にとっては、図書館員に対して研修を受講させ新しい知識を身につけさせようとするよりも、知識を皆で共有し、それを評価する文化を組織に根付かせることが、変革を促すナレッジ・マネジメントとしては効果的である。大学図書館が革新的なサービス／事業を通じて大学や社会に貢献するためには、幅広い知識が仕事で必要になっていることを認識し、研修プログラムだけでなく組織の中で知識の循環が起こる仕組みづくり、環境づくりが重要である。職業団体である学協会における知識の交換については、一定の効果があるため、会員数減少など経営上の問題点が解決できれば、今後もプロフェッショナルの知識基盤としての価値を維持し、向上させることができるだろう。

回答者の主観的な判断にもとづく指標ではなく、より客観的な指標を用いるなど、分析モデルには改善の余地がある。また、本研究では含められなかった、組織規模の違いや、個人のキャリア志向の違いにともなう知識獲得の違いの分析は、今後の課題である。組織を越えたソーシャル・ネットワーキングを行うプロフェッショナルと、そうではないプロフェッショナルで、知識獲得・活用に大きな差があったが、今後はその要因の把握を進めることによって、ナレッジ・プロフェッショナルに効果的なナレッジ・マネジメントの方策がさらに提案できるであろう。

(文字数： 3,947 字)